

教育雑談：論説

著者	迂行, 道人
雑誌名	龍南會雜誌
巻	3 6
ページ	7 - 1 8
発行年	1895-05-07
その他の言語のタイトル	教育雑感：論説 教育雑談：論説
URL	http://hdl.handle.net/2298/4563

讀者幸に再思せよ。

世 態

素		要				
物理眼	尙武	勤儉				
	乏		文弱			
乏	富	富	甲種	假	文	
富	富	乏	乙種			
富	富	富	真		明	

(完 結)

教 育 雜 談

迂 行 道 人

行には迂にして、言にのこ敏き者かある。あつて人にそしられんと思へば、燒きすてん方然るべけれど、考へつることは、人にも問ふは、自ら進むる所以にこそあなれど、遂に愧を忍んで茲に教を乞ふことゝはあしぬ。四月十五日誌。

“Every person has two educations, one which he receives from others, and one, more important, which he gives himself” — *Gibbon*

教育と云ふは、一も二もなく、唯教師より誘道啓發せらるゝの外、別に途なき如く思ふものあれど、之

は非あり。誘導固より必要あれども、外に大なる必要件ころあれ。其は他ならず、自奮と云ことは是なり。語を換て云は、自ら吾が身を教育することあり。山に登るには、八面其道あるべしと雖、現在の位置と現在の身にては、何の方向より、何の路をたどり、何の谷に沿ふべきなどは、其地理に詳しき人に問ふべし。然れども、山巔に達せんとするは、即我身あり、我にして動ずんば、徑路に通すとも何の用なし。よき我身さへ奮發せば、少の路の誤あるども、必ず本懷を遂くべし。教育の事亦た斯の如し。焔々たる烈志胸間を燃え上り、汪々たる希望五体に充溢し、満身は活氣なるあらば、よし誘導なくとも、自ら其道を求めて進むと、猶は積水を山巔より決するか如けん。假令ひ満身は活氣あらずとも、一片耿耿の希望だに存せば、畢生の功業えて遂べきあり。希望は自奮を促さ、自奮は活路を開く、高潔は希望なく、凜烈の志氣なき者は、日に萬卷を繙き、諄々の教誘を蒙むると雖も、碌々として一生を瓦礫に伍せしむるに至る。冷灰は萬解を積むも冷灰あり、萬世焔を上ぐべからず。一點の燭火と雖も、之を用ゐるは高樓大廈も烏有たらしむべく、山岳江海も之を繙算すべし。『ディレスホド』の少年が抱きし一片の希望は、遂に東亞を震動するに至れり。希臘の辯舌家はいかにして其志を果せしや、英國一流の外交家は如何して其身を立てしや、政治家にまれ、學者にまれ、宗教家にまれ、苟も古今其名を知られるものにして、一人として希望の戈を取て自ら新生面を開かざるはなし。希望は志なり、希望あれば工風を生し、勇氣を生し、奮勵を生す。希望は光火あり、之あれば満身活潑々地たり、世界之か爲に動く。希望なきの生活は冷灰なり、木石あり、一身も熱する能はず、一塵だも之を動かす能はず。去れば鼓吹的詩人は歌ふて曰はく、

In the world's broad field of battle,

In the bivouac of Life

Be not like dumb, driven cattle!

Be a hero in the strife.

ど。希望にして朦朧捕捉すべからざるものからしめは、恐くは牧場に追はるゝ牛馬にして終らん。若
玄之に反して、競争場裡の『ヒーロー』たらんと欲せば、希望をえて明確からしむべし、充實あら
べし、而て萬事の動機たらしむべし。愈々明確よ、愈充實あれば、工風自ら精く、奮勵自ら鋭く、所謂自
ら教育するの基を開くをうべし。しかはあれど、世間悉く明確なる希望を抱く者のみにあらず。去れ
ば之を教導啓發すべき任に當る者は、常に此活氣を青年の胸懷に鼓吹して、活き／＼たる靈潑の人物
たらしむべし。學の東洋的なると。洋風なるとは、問はざるあり、其舊さと新さとは顧ざるあり、唯其
希望をして高遠からしめ、活氣をえて、悠 ユバースチンズカールブレセント 久 クラシムベズ ちらしむべし。是れ實に今日の教育に於て要する
處の一なり。神陽先生の靈氣は、當時榮城の藩士を如何に奮起せしめたる歟、東湖の薩南書生に於け
る、二十一回猛士か其塾生に於ける、清風小楠か其四圍に於ける、一として點火を青年の胸中に投せ
ざるはなかりき。數子の跡固より追ふ可らざるものあるべしと雖、せめて現時の若輩をして、冷灰的
のものと化せずんば幸なり。

自奮自育は斯の如く須要ありと雖、之のみにては教育の目的は達し難し、必ず他人の教誘啓發を要
す、蓋し時間と腦力とを少く費して良果を得ること最も適する所あればなり。去れば、教育家は固よ
り智識經驗教授に於て秀つる處なかるべからずと雖、其最も要する所は熱心あり、即ち生徒を愛する
の情溢るばかりあるに在り。學藝いかに秀つとも、熱心ならざれば其教ふる所徹底せず、説く所虛文

に失するに至る、實に之のこならず、其教授する所冷淡に流れ、聽者の解するど解せざるとは問はず、徒に儀式に流れて、遂に其目的を達する能ざるに至る、故に教育家たる者は、博愛同情の精神を以て、之を生徒の心中に置き、一意生徒の心意と利益とを計て、苟も寸毫の不利難解の所ありと見ば、自ら忍ぶ能はざるものあるが如かるべし。斯の如ければ、よし學識の淺學ある所ありとも、生徒は其説く所に傾聽し、其精神に化せらまて尊重崇敬し、互に熱情を以て愛すること、孤兒の慈母に於ける如くあるべし。迂愚なりとて之を冷笑するは非あり、遲鈍ありとて之を顧ざるは非あり、一視同仁、其迂なる所以を察し、其鈍ある所を觀之、應するの手段を考へ、之に施すの術を究めんと欲するの同情だにあらば、豈に手段と術とに乏きことあらんや。

凡ろいかなる學課にても、初て之を教ふる時は、先づ學課の性質要用を説き聽かしめ、若し専門の學課あれば、最も注目すべき諸點、若し豫備學課あれば、如何なる能力を發達養生する爲に設けられたるものあるやと、明ろに説明すべし。同學課にしても、専門に修むる人と、豫備に脩むる人とは、教授の目的を異にす、從て其手段を異にす。數學の如き、或程度までは、誰にも必要あれど、其以上は、必ずしも難問を解するを目的とせざるものあり。斯る者には、數學的志想、即明確、秩序、分解、綜合の念を養はせむるを務むべし。何の學課にあれ、或程度以上は、専門なると専門あらざるに就て、明ある區別を立て、本來其學課を設けられたる精神を忘却すべからざるあり。教科書を用ゐるものにては、其教科書の性質を説き、其長所短所を指摘、漫に所説を盲信する所あからしむるを要す。或は其著者の性行、學問、其時代の風向、其著作に由て與へたる後世の感化、著者の序言などは、時々之を了得せしむるを要す。恰も一個の菓物を與へて、其花を説き、其樹を説き、其所在、其用法等を聽あし

むるか如し。

國人は、古より學問と云へば、漢學、國學より外に學ひしことをなく、其二學と雖、何も文字上にこそ用ゐたれ、言語上に使用せしこと至て少く、漢學の如きは、言語としては用ゐざりし程のものあれば、今日に至ても、學問と云へば、讀むことの外は、話すこと、書くこと、聽くことあるを知らざるが如し。従て、外國語を脩むるにも、談話、作文、聽取することを怠る風あるは、大なる弊と思はる。教導の任に在る者は、最も此等の點に注意せざれば、或は陋を生し、弊を生するの不幸に陥るべし。若し死したる國語を教ふる時には、左より耳と口とを要せざるべしと雖、英獨佛の學語の如きは、星辰の覆ふ所、江河の流る所、濠洲の南より綠島の北に到るまで、碧眼の住する所として行はれざるなき程なれば、苟も大國民として世界の舞臺に立たん者は、必ず話し、必ず聽き、必ず書するの力を有せざるべからず。習ふ者、教ふる者、共に此決心を要す。既に多の意向此に傾くは、之を成すに於て何の難き事かあらん。

外國語の譯解を教ふるには、十人十種、色々の方法あるべしと雖、予が數年來の經驗に由て斯くありたきものと思ふこと一つあり。必しも譯解の時にのみ限らざれど、譯解の時は、よく人々の能力のいかんを見るを得べし。或人は想像力に乏しきあり、或人は推理力に乏しきあり、或は分拆力に欠くるもあれば、記憶力に欠くるもあり、判斷に苦む人、原創に力なき人など、様々あるものが、歷々として之を知るを得。故に譯解とは、難句難文を教へ放しに教へたるに留らず、例之へは一人に譯解せしめ、若し其人が推理力に乏しと見れば、斯る文は斯る意味にして、君の言ふ如くすれば斯くあるあり、斯ては前後照應せず、前段はしかくあり、此段はかくあり、由て此くなん説明すべし、此くこゝろ推

理すべけれ。其意義を教へたる上に、其短所を指摘して、本來の性質に打撃を加へて、之を改進せしむべし。是れ予が望む處の教授法あり。斯の如くあれば、本源既に改まるに近くを以て、再び斯の誤解を生ずること少し、設ひ誤ることありとするも、之を試む再三再四あらば、次第に其性を矯むるをえん。是れ實に一舉二得するの策あり。若し教育と云ふものをして、唯教ふるのみと云ばいざ知す、苟も心性の發達と其圓滿とを望むものとすれば、生徒の性能のいかんを看破して、之を矯正改進を計るは、蓋し誤謬の事に非ざるべし。下流の濁るは源泉の清からざるに因るを知らば、教育の事亦た之に類するものなりと云ふべけんや。人或は斯の如きは言ふべくして行ふべからずと言ふことあらん、然れども、是れ決して行ふ可らざるに非らず。教育に於て人性を陶冶する能はずんば、斯の如きは之を行ふも固より益ありるべしと雖、苟も木の撓むべく、禽獸の其性を變せしむべき如きあらば、焉ぞ之を人に於て行ふ能うとせんや。況んや教育の原く所、實に此に在るに於てをや。若し眞に能くすべからずと云ふものあらば、そは其人が子弟を愛するの情冷々たるものあるに因るとやいふべからん。又た或者はいはん、斯の如くするは、是を譯解の本旨に非ず、譯解は唯難澁の個所を教ふれば足ると、是れ恐くば短見者の語あらん。食物は唯食せんを爲に食のみ、別に意志あるに非ずと云に異る處なし。食物の只食せんか爲に食するに非ざるを知らば、譯解も亦た教ふるのみに非ざるを知るにたらん。

何の學課にまれ、試業の時は各充分の思考を費し、充分の技量を表さんとせざるはなし。故に其答案と云ふものは、一定の期限に於ては出來べき丈最もよく爲したるものにして、或は解せざるもあるべく、半は解して之を完ふせざるもあるべく、或は朦朧として曖昧に記せるもあるべし。然れども、此等

は其時に於ける滿搾の腦汁より出て來れるものにして、自ら失策せることを痛く感ずるや必せり。従て彼處は如何なる意義ありしならん、此處はいかに辨すべかりしならん、彼と此との間は斯く論すべきなりし、否しかくよこそ説くべかりつれど、尙ほ工風追想すること多し。去れば試業の後、其問題も就て、一々詳細なる説明を與へ、若し出來べくんば、可成は其答案中にて良きもの惡きものを取て、之を批評を加へんとせば、生徒に取ては、實に靴を脱して痒を搔くの思あるべし。失策を感ずること深ければ深きほど、其説明を欣ぶことも亦た深く、自ら其の解せざりし所以を省み、論辯の不足せ、玄所、想像、判斷、推理などの欠け、所あるを痛く感じて、誤を再ひすまじと思ふべし。是れ生徒の自奮心を勵すに於ても、其心性陶冶に於ても、大なる利を與ふるものに非ずや。若し諸學校の成績を出すを以て生徒の反省を促すものとすれば、更に進て右の方法を取ると、一層目的を完ふする所以に非ずや。右と同一の理由にて、答案には惡き所や、不足の所、所論の宜き所などに注意、批評等を記して、之を還付するは、利益ある事と思はるゝなり。去りながら、或人などの云ひを聞くに、答案は度々之を保存して、前後比較するに用ありと。之れ如何なる理由に因るや知らずと雖、或は前のものと後のものと比して、前に良して後に惡ければ、後のものを前のものにて斟酌するものか、但しは前後比較して其人の性能の傾く所を見るものによ。何をよしでも面白うらず、若し前説の如くあれば、是れ能力の開進と勉勵とを促す所以に非ず、前の良かりしは注意、勉學、自奮の効あらん、後の惡きは是等に於て不足せしに因らん。良きものは之を賞し、惡きものは之を貶す。是れ開進と奮勵とを促す所以なり。故に前後相斟酌する如きは、會生徒を害する所以あらん。若し後説の如くすれば、其精神之甚た宜し——予は雙手を擧げて之を贊す——然れども、いかんせん未だ前後の答案を比較して、予の性能

の欠點未進なる所を摘發指示せられたることある、徒た予のみに非ざるべき。去れば、答案を還付せずして何の効やある。眞に各の答案に就て、前後比較して之を以て生徒の性能に打撃を加へんとする者あらば、是れを良法を採れる者といはん。固より斯くありたしと思ふこと切あり。或は還付せざるの理由とて、後日誤などの生したらん時、之を正す爲に鄭重に保存すといはん。去りながら、後日誤などの生ぜざる如く審査して評點を附せば誤からん、是れ其の職に忠ある所以あり。故に何の點よりするも還付せずとて別に利益あるを見ず——予の所謂良法を採る時は別なり——而して之を還付するに於ては、各自を反省せしむるの利あり。

一たび讀みし處は之を再ひすると云は教育の秘訣あり。習ふ人、教る人、共に之を以て進まば利益あるを知るべし。記性を養ふことは教育の一の目的にして、而て之を成すには復習を措て別に良法なきを見る、徒らに先へくと進んで顧ることを知らざれば、力を勞する多くして功を收むること却て少し。前に解せし所を記すれば、後に其解に苦むことある、後の者は前の例を以て之を類推するを得せしむ、猶ほ歴史の政治に必要な如く、記性を養ふは教育に避くべからざる要件なり。

品行と云ふことは、東西古今の別なく、慎むべきは言までもあることあるから、修學の途に在るものは最も心すべき事なり。去れど、往々にして他人に指彈せらるる者あるに至る、之れ誠に痛むべき事にして、自ら自然の結果を察知せざるが如きは、不憫の限なり。故に之か監督の任に在る者は、誰彼の別なく、少にても耳にすることあらば、懇々と諭え、或は引受人に知照して之を戒め、隱に之を説て其改善を促し、可成多くに知らざらしめし。品行の修むべきは、猶學藝の苟もすべからざると少も異なるなし。英雄細行を顧ずあて云ふは、疵措大の譏言のみ。學藝を求むるに汲々たりし頃は、少々の不品

行者と雖用ぬしも、今は然らず。學藝品行共に優等のものを擇ふ時あれば、各自の慎むべきは固より
にまて、又た充分之を監督教戒あらんことを望む。且つ近來は体育盛に行はるゝに關せず、生理上の
法則を顧ずして、無暗に學術に旨進して、身体の衰弱を思はざる如きもの間々之あり。斯の如きは伍
伴の人之を戒むべしと雖も、教育家にまて之を知らば、深く其慎むべきを論すは、最も効驗あること
あらん。假令ひ旨進するまでには至らずとも、衰微の徴を示す如きあらば、引受人と共に之を戒むべ
し。貴重の身にてありながら、一朝不測の患に沈む如きあらば、國家の不幸のみならず、一身の不幸と
一家の厄災たるは、言語の外に在らん、能く心すべき事にこそ。

世の中の事は、何を成すに付ても、夫れの方法あるものにて、學問をなすにも、亦た相應の方法あ
り。同じ目的を達するにも、色々の方法ありて、迂遠あるもあれば、徑捷あるもあり。可成時間と腦力
とを費すこと少くして、可成多の智識を正確に得、身体を壯健にすることを得ば可なり。誰にても經
歴ある人は、必らず失敗と成功との歴史を有す。此失敗と成功とは、大なる教訓にして、之を以て他人
を導き、或は之に依て考及せる事を語るは、大に便益を與ふる譯にまて、未だ年若き者には、最良の方
法を授くる所以あり。予は讀書に付て、斯くまて利益を得たり。或時は斯る思想を懷きて此事を研究
したり、何の論に就ては斯く反論を試みて失敗しふり、彼の時は斯る説を出して賛成を得、或は斯る
實驗をなして予の考の誤りしを知れり、何某は斯くせり、何の事は斯くせばと思ふなど、折にふれ時
につれて、談話若くは挿演する如きあらば、年少者は又た此等の談に由て、自ら啓發改進する方法
を得べし、加之らず此事を研究せんにはかゝる書を參考すべし、彼事は此著を讀んで知るべし、或は
勢力論に就ては某の書を讀むべし、革命論あらば某著を以て參考とすべし、其心説は此を讀む方宜ら

ん、元子論はかく、經緯學はかく、受精説はかく、日本歌學は此は宜けれど彼は惡しなど、或は評し、或は論し、已の讀める丈の中より知る丈の中よりにても之を聞かしめば、其攻學に良法を與ふること、實に著しきものあるべし。年少の者は、見聞淺薄ふ、經驗至て蘊なれば、之に授くるに方法を以てするは、暗夜に燈を與ふるに異らず、之に依て正路をたどるを得べし。是れ他人の經驗に由て、其經驗を、再びするを要せず、從て時間と腦力とを消費すること少きを得るなり。此贏け得たる時間と腦力とは、外に用て智識を増し、身體を壯にするを得べし。若し果して此の如くなるをえば、大に人生を長めたるものと謂つべし。世の進化につれて命は短まると云ふに、却て長むるをうるは經濟の妙法に非ずや。

俗界に於て忌まゝゝゝゝ事のあるは、世の常として異まねど、神聖ある學校などには於て、是迄て忌まはしき事の起りしを耳にせしこと再三ありき。龍田の松常に緑に、白川の水草色を變せず、春風洋々として和氣常に溢る、竊かに世の模範を以て期す。つらゝゝ世の所謂騷動と云ふを觀るに、多くは師弟相和せず、上下其情を知らざるに原くか如し。而して其和せずと云ひ、知らずと云ふものゝ因する所は、子弟の尊重恭敬の風を失せるに在るか如し。師長の言は、之を奉し、其の命之を重んずる如きは、人たる者の當に行ふべき美德にして、子弟の最も遵守すべき所あり。而るに或は輕佻に流れ、不敬に失え、遂に師長を尊重せざるに至る。是れ實に子弟自身か招ける罪に非ずして何ぞや。斯の如く、されば、或は代言的となり、冷笑的となり、眞率敬虔の風全く亡ひて、終に、一校を紊り、一身を誤り、遂に一國の危害を醸すに至る、慎しみて、猶餘あることなり。去りながら、教導の任に在る者も、亦た自ら躬を以て率ゐる所なかるべからず。可成雅量を有し、胸度を大にして、子弟の忍びざることを爲

す時は、憐んで之を正すの心ありたきなり。詰る所、滿腔の愛情ありたきものなり。儼ある時は凜乎として怒り、和ある時は霽々として諭さは、恐くは彼の思まはしき惡魔を一掃するを得て、此に古の純乎たる師弟の妙相を見ることをえん。世若し之を疑ふものあらば、請ふ白水の濱、綠樹鬱として茂り、煙霞地にたふびくの所に來て一覽せよ。

風雨其順を得、寒暖其度に叶ひ、土壤人工共に適するありとするも、樹木にまて自ら生ずる力なくんは、如何ともすべからず。自ら生ぜんとすれば、岩石の上にも其根を延はす、人間豈に斯の如くあらずとせんや。自ら進むものは其道を知り、自ら覺るものは其法を悟る。人間の秘訣何ぞ他あらん、唯、自覺に在るのみ。自ら進まざれば他を進むる能はず、自ら覺らざれば他を覺らざる能はず。社會は汝に來れと言はず、汝の進んで來るを待つなり。社會は汝の爲に特に空位を備ふるよし非ず、汝自ら進て之を取るべし。朋友の親、親戚の縁ありと雖も、自ら進まざれば頼むに足らず。才力ありと雖も、自ら勵まざれば頼むに足らず。財寶ありと雖も、自ら勉まざれば頼むに足らず。學藝退き易く、業務は荒く易し、血性あるもの、何ぞ自奮一鞭せざる。

We must ourselves be and do, and not rest satisfied merely with reading and meditating over what other men have been and done. Our best light must be made life, and our best thought action.

自奮する者は自ら重んずるに至る、自ら重んずれば勇氣決心を生ず。是に於てか百艱當るべし、希望達すべし。藝國の哲儒は、十有二歳にして、既に古聖賢に群せんとの希望を懷きて自奮せり。捲き來る暴風も顧みず、逆強く撃潭も意とせず、アルプス山を目あてに進み來りし一團の青年の精神はろもい

ふにぞや。試に左の一節を誦せば、自ら鼓動の高なるを知らむ。

"Try not the Pae!" the old man said;

"Dark lowers the tempest overhead,

The roaring torrent is deep and wide!"

And loud that clarion voice replied,

Excelsior!

嗚呼、自奮ある哉、自奮なる哉。志ある者は事遂に成る、涓滴も之を久ふすれば岩石を穿つ、いざや進ずん同胞の友よ、國家の要する處は堅城に非らず、鉄壁に非らず、人物に在り。

The prosperity of a country depends, not on the abundance of its revenues, nor on the strength of its fortifications, nor on the beauty of its public buildings; but it consists in the number of its cultivated citizens, in its many of educations, enlightenment, and character! — *Lutifer*.

國家活動の本源

杉山 富樫

活眼家は動に在りて靜を忘れず。故に其思想悠遠に、其事業宏大あり。其思想悠遠あるが故に、其謀策千百年に影響し、其事業宏大あるが故に、其餘澤八荒に普及す。徒ら動に狂熱し、乱に奔走して、以て國家百年の大計を畫籌せんとするは、恰も流水に文字を表記せんとするが如し。

國家大に活動する時には、亦た必ず大に平靜ある所ある可らず。活動と平静とは一にして二、二にして一、瞬間も相離る可らず。猶ほ明鏡の表裏のごとし、物影を寫さる裏面をくれば、如何でか明鏡